

こおろぎ

発行日 2004年9月1日 **No.138**
発行元 株式会社
オリジン・コーポレーション
代表取締役：杉井保之
〒426-0044 静岡県藤枝市大東町777-1
TEL 054-636-4300 FAX 054-636-6187
E-mail origin@ck.tnc.ne.jp
URL <http://www.origin-co.com>

千の風になって

9月7日、我が家のアイドルであり、私の末娘のルビー（猫）が亡くなりました。

6年前、生まれたばかりの猫が、我が家の網戸にへばりついてたのが最初の出会いで、その数日後、当時小学校3年の三女の後について、学校の近くまで行ってしまったため飼うことになりました。

あまり家にいることのない私の代わりに、毎日、妻の腕の中で寝ていたので、妻のショックは大きく「ルビーが死んじゃった」と電話してきた妻の声はほとんど絶叫でした。そのあまりの落胆振りから、妻や子ども達のショックが気がかりでしたが、その日は東京で講演があり、すぐに戻ることが出来ませんでした。

そこで社員さんに次の詩を買いに行ってもらい、家族みんなに読むように伝えてもらいました。

千の風になって

私のお墓の前で 泣かないで下さい
そこに私はいません 眠ってなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬にはダイヤのように きらめく雪になる
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる
夜には星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないで下さい
そこには私はいません 死んでなんかいません
千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています

千の風に 千の風になって
あの大きな空を 吹きわたっています
あの大きな空を 吹きわたっています

生き物は、死んだらどうなるのでしょうか？

私はこれまで、死んだらそれで終わりになると考えていましたが、それではあまりに悲し過ぎます。今回、ルビーの魂は肉体から離れたましたが、その存在は風となってこれからも私たちと共にいると感じています。

ところで、皆さんが、最後に泣いたのはいつでしょう？

これまで何度も葬儀に参列していますし、テレビでは幼い子どもの死が伝えられていますが、私はほとんど涙を流すことはありませんでした。いつの間にか、私は愛することの悲しみを忘れていた気がします。果たして、私が死んだとき、何人の人が泣いてくれるでしょう？ 皆さんには、死んだときに泣ける人が何人いますか？

今回の突然のルビーの死は、私たち一人ひとりの身にも、いつ何があるか分からないことを実感させてくれましたし、涙を流せる幸せを教えてくれた気がします。

今、一番悲しいことは、この悲しみが時間と共に薄れていくことです。火葬の時には、「千の風になって」の詩と、家族みんなて書いたルビーへの手紙を一緒に添えることにしました。

これからもずっと私たちと一緒にいてください。

ルビーは、私たちの家族であり、天使でした。

ルビーが、前の家の網戸に引っ付いていた日から6年くらいが過ぎました。早かったような、長かったような気がします。でも、こんなに早く別れられなかった。今、すっごく悲しいけど、今まで本当にありがとうございました。
ルビー、大好きだよ。
ひかり

ルビーへ
ルビーは、この家に来て、この家に住んで、私たちと暮らして幸せだった？ 私はルビーに会えて、楽しく過ごさせて幸せだったよ。ルビーは、私のこと好きだった？
私は、ルビーのことが大好きだよ。いつまでも大好き。向こうに行って、もっと幸せになるんだよ。
美咲

やさしいお便り

今回の「こおろぎ」は、皆さんのためというより、自分の悲しみを綴ってしまいましたが、私のところに届くお便りには、とてもやさしいものがたくさんあります。

先日も私がトライアスロンをやっていることを覚えていてくれ、新聞に掲載されたトライアスロンの記事や資料を送ってくださる方がいました。資料をもらいに行ったり、新聞を切り取って郵送することは面倒なことです。私のことを心に留めていてくれなければ、その記事に目が留まらなかったと思います。

このような「私のためのお便り」をもらうと、心がやさしくなり、本当に励まされます。

多くの人は、自分のことを思っていてもらいたいと願っています。私もハガキを書くほうですが、気がつく自分の書きたいことを書いていたりするものです。こうしたお心遣いを見て、私も相手のことを思った、やさしいお便りを書きたいものだと思いました。

やさしい気持ちを、ありがとうございます。

お便りコーナー

難病の子どもとその兄弟が、日本最高峰の富士山を登る企画があり、長男の体調も良かったため長男と長女が参加しました。
登山に対して主治医からは肺の機能が弱いので空気が薄い高地では肺が耐え切れないうちも片足が義足なので急斜面をみんなのペースではついていけない等、本人の希望に反して反対意見が多く出ました。
しかし、主催者からの勧めと、当日、たくさんのボランティアと医師・看護師の同行があることで参加することが出来ました。
私などは何かをしたいと思っても、周りの反対に振り回されて、目の前にあるチャンスを失ってしまうことがよくあり、後悔の連続ですが、これからは周りに振り回されず挑戦していきたいと思いました。
結局、富士山頂まで行くことは出来ませんでした。子どもたちもこれからの人生の一步が踏み出せたと思います。ありがとうございます。
高遠 勲